

6. 南詔国後期の対外関係②

6.4 南詔王権の拠って立つもの

- ・この段階で「伝統的権威」を主張することは困難
（『南詔徳化碑』でも閣羅鳳は「雲南王」（＝皮羅閣）の息子、としか言っていない）
- ・「宗教的権威」の主張も9世紀前半まではなし（9世紀後半以降は仏教など……）
- ・外権力からの承認 → 「雲南王」・「贊普鍾」・「日東王」・「南詔王」
- ・「カリスマ的権威」 → （唐・吐蕃との）戦争による王の力の証明？
異牟尋の後半に対吐蕃遠征が終息 ← → 尋閣勸・勸龍盛・勸利盛の王権不安定
豊祐の代に持ち直す ← → 成都侵攻，東南アジア遠征
→ 王権を支えるために外征を必要とする？ 東南アジア的王権？（cf. Wolters の「マンダラ」論）

6.5 唐－南詔国関係の破綻

■それでも避けられない待遇低下

- ・大中年間（847～859）の末：成都留学生・朝貢使節（随員）の増加
→ 西川節度使杜悰、節減を上申 → 裁可される
- ・このころ吐蕃王朝は完全に瓦解＝中国西南における政治・軍事的バランスの根本的な変動
→ 軍事的緊張の消失から、唐朝／西川節度使が南詔国を切り捨てはじめた

■唐－南詔国関係の破綻

859 唐の宣宗崩御／同年 豊祐死、世隆継ぐ

- ・弔問にかんする行き違い：世隆の名が玄宗（と太宗）の諱を犯す
→ 唐朝は南詔王世隆の冊封を行わない
世隆は自立、皇帝を自称し、元号を建てる → 唐朝の秩序からの離脱宣言

859 年末 兵を派遣して播州（貴州遵義）を攻める → 以後十数年間にわたって戦争状態が続く

6.6 安南（交趾）方面への遠征

860.12 段酋遷の率いる三万余の南詔軍，安南都護府を攻略，これを陥す

861 6月 唐軍，安南を奪還 7月 南詔軍，邕州（広西南寧）を陥す

862.2 ふたたび安南侵攻 唐は中原（河南・江南）から三万の援軍を送りこれを防ぐ

862.11 5万の南詔軍が交趾城を攻撃

863.1 交趾城陥落

→ 866年7月まで3年半にわたり交趾城を占拠

■安南侵攻の主導的人物

段酋遷（安南節度使）・楊思縉（善闡節度使）（＝柘東節度使）

楊忠義（柘東判官）・楊緝思（善闡節度使）ら

→ 安南節度（使）は占領時に臨時設置（cf. 鉄橋節度）

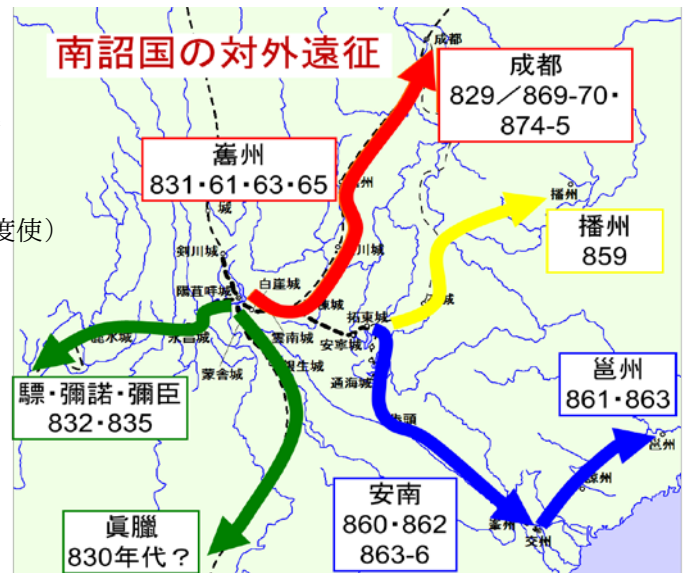
それ以外は柘東節度関係者が多くを占める

■高駘による交趾城奪還

864.7 驍衛將軍（＝禁軍）高駘，安南経略使となる

866.6 高駘，交趾城を包囲

11月 交趾城を回復，段酋遷・朱道古らを斬る



史料 6.13『蠻書』卷十 南蠻疆界接連諸蕃夷國名第十

彌諾國、彌臣國，皆邊海國也。呼其君長為壽。彌諾面白而長，彌臣面黑而短。性恭謹，每與人語，向前一步一拜。國無城郭。……在蠻永昌城西南六十日程。太和九年曾破其國。劫金銀，擄其族三二千人，配麗水淘金。

驃國，在蠻永昌城南七十五日程，閻羅鳳所通也。其國用銀錢。以青磚為圓城，周行一日程。百姓盡在城內。有十二門。當國王所居門前有一大象，露坐高百餘尺，白如霜雪。俗尚廉恥，人性和善少言，重佛法。城中並無宰殺。又多推步天文。……有移信使到蠻界河暎。則以江猪白氈及琉璃罌為貿易。與波斯及婆羅門鄰接。西去舍利城二十日程。

……………

女王國，去蠻界鎮南節度三十餘日程。其國去驩州一十日程，往往與驩州百姓交易。蠻賊曾將二萬人伐其國，被女王藥箭射之，十不存一。蠻賊迺回。

水真臘國、陸真臘國，與蠻鎮南相接。蠻賊曾領馬軍到海畔，見蒼波汹涌，悵然收軍卻回。

史料 6.14『資治通鑑』卷二百四十九 大中 12 年（858）6 月

初，安南都護李涿為政貪暴，強市蠻中馬牛，一頭止與鹽一斗。又殺蠻酋杜存誠。羣蠻怨怒，導南詔侵盜邊境。考異曰：舊紀：「琢侵刻獠民，羣獠引林邑蠻攻安南府。」按蠻書，寇安南者南詔，非林邑也。

史料 6.15『資治通鑑』卷二百五十 咸通元年（860）12 月

十二月，戊申，安南土蠻引南詔兵合三萬餘人乘虛攻交趾，陷之。考異曰：新南詔傳：「大中時，李琢為安南經略使，苛墨自私，以斗鹽易一牛。夷人不堪，結南詔將段酋遷陷安南都護府，號白衣沒命軍。懿宗絕其朝貢，乃陷播州。安南都護李鄠屯武州，咸通元年，為蠻所攻，棄州走。天子斥鄠，以王寬代之。」按宣宗時，南詔未嘗陷安南。據新傳，則似大中時已陷安南，咸通元年又陷武州也。且李鄠安南失守，然後奔武州，非在武州而棄之。新傳誤也，今從實錄。都護李鄠與監軍奔武州。

史料 6.16『資治通鑑』卷二百五十 咸通 3 年（862）11 月～咸通 4 年（863）正月

南詔帥羣蠻五萬寇安南，都護蔡襲告急，敕發荆南、湖南兩道兵二千，桂管義征子弟三千，詣邕州受鄭愚節度。

嶺南東道節度使韋宙奏「蠻寇必向邕州，若不先保護，遽欲遠征，恐蠻於後乘虛扼絕餉道。」乃敕蔡襲屯海門，考異曰，實錄「詔襲且住海門」。是令棄交趾，退屯海門也。按襲死時猶在交趾。蓋詔書至時，襲已被圍，不得通也。鄭愚分兵備禦。十二月，襲又求益兵，敕山南東道發弩手千人赴之。時南詔已圍交趾，襲嬰城固守，救兵不得至。

（咸通四年春，正月，庚午）是日，南詔陷交趾，蔡襲左右皆盡，徒步力戰，身集十矢，欲趣監軍船，船已離岸，遂溺海死；幕僚樊綽攜其印浮渡江。……南詔兩陷交趾，所殺虜且十五萬人。留兵二萬，使思縉據交趾城，谿洞夷獠無遠近皆降之。詔諸道兵赴安南者悉召還，分保嶺南西道。

史料 6.17『資治通鑑』卷二百五十 咸通 7 年（866）6 月

南詔酋龍遣善闡節度使楊緝〔思〕助安南節度使段酋遷守交趾，以范呢些為安南都統，趙諾眉為扶邪都統。監陳敕使韋仲宰將七千人至峯州，高駢得以益其軍，進擊南詔，屢破之。捷奏至海門，李維周皆匿之，數月無聲問。上怪之，以問維周，維周奏駢駐軍峯州，玩寇不進。上怒，以右武衛將軍王晏權代駢鎮安南，召駢詣闕，欲重貶之。晏權，智興之從子也。是月，駢大破南詔蠻於交趾，殺獲甚衆，遂圍交趾城。

6.7 劍南西川方面への遠征

861.7 / 863.12 ~ 864.1 / 864.7 / 865.4 邛州攻撃

・清平官董成ら成都に至り、西川節度使李福との間で儀礼を巡って紛争

869 楊酋慶を遣し、董成の釈放を謝す→定辺節度使李師望、楊酋慶を殺す

869.10 「南詔驃信酋龍傾国入寇す」

874 再び西川攻略 →唐朝は高駢を再起用 →南詔軍もこれを聞き退却（875.正月）

876 高駢に使者を送り講和を求める

■西川侵攻の主導的人物

・驃信酋龍（＝世隆）→驃信は南詔王の称号（語義不明）

・坦綽杜元忠→坦綽は清平官の別称 『通鑑』「用事之臣」：清平官の中でも筆頭？

「坦綽杜元忠、日夜酋龍に全蜀を取らんことを教う」（『新唐書』南蛮伝中）

・「清平官董成等十九人」（西川節度使への使者）

6.8 対唐遠征の終息

877.2 世隆（酋龍）没し、子の隆舜（法）継ぐ

「酋龍年少くして殺戮を嗜み、親戚の己と異なる者は皆な斬、兵出でて寧歳無く、諸国更に讎忿、しばしば衆を覆し、国耗虚たり」 →国内にも少なからぬ反対派？

877.2 陁西段瑳宝を嶺南西道（邕州）に遣わし講和を求める

879.2 徐雲虔、嶺南西道より善闡城（昆明）に至り、驃信（＝隆舜）と会見

■対唐遠征の動機・目的

※諸説あり、定説なし

・略奪戦争（人的・物的） / 領土拡張

・南詔王の権威低下を食い止める

・王族蒙氏（＝奴隸制段階）と支配下の白蛮（＝農奴制段階）の間の階級矛盾 など

※両方面（安南／成都）の経過の比較

共通点：直接の契機は唐軍の周辺民族に対する横暴←辺境における緊張感の喪失（吐蕃・唐の衰退）

相違点：両方面の直接指導者

安南：善闡節度使 とその管下（楊氏・段氏中心）

成都：南詔王（世隆）の親征、坦綽杜元忠

※滇池地区の地位上昇

・滇池地区で楊氏・段氏をはじめとする「大軍将」クラスの統治者が大きな力を持つ

・ただし南詔王が頻繁に滇池地区に滞在している事実もあり、完全な「東西分裂」とはいえない

■唐朝に対する態度

・世隆が皇帝号を称し、建元（開戦前）

・使者に「抗礼」を要求（戦中）

・「表」「貢」など臣下→唐皇帝への形式を使わず、唐と「兄弟」「舅甥」関係を要求（戦後）

・公主降嫁の強い要求

→かつての唐－吐蕃と同様の関係を指向（軍事遠征はそのためのデモンストレーション？）

史料 6.18 『資治通鑑』卷二百五十 咸通 7 年（866）3 月

南詔清平官董成等詣成都，節度使李福盛儀衛以見之。故事，南詔使見節度使，拜伏於庭，成等曰「驃信已應天順人，我見節度使當抗禮。」傳言往返，自旦至日中不決；將士皆憤怒，福乃命捧而毆之，因械繫於獄。劉潼至鎮，釋之，奏遣還國。詔召成等至京師，見於別殿，厚賜，勞而遣之。

史料 6.19 『資治通鑑』卷二百五十一 咸通 10 年（869）10 月

是月，南詔驃信酋龍傾國入寇，引數萬眾擊董春烏部，破之。十一月，蠻進寇嶺州，定邊都頭安再營守清溪關，蠻攻之，再營退屯大渡河北，與之隔水相射九日八夜。蠻密分軍開道，逾雪坡，奄至沐源川，滂遣亮海將黃卓帥五百人拒之，舉軍覆沒。

史料 6.20 『資治通鑑』卷二百五十三 乾符 4 年（877）2 月

南詔酋龍嗣立以來，為邊患殆二十年，中國為之虛耗，而其國中亦疲弊。酋龍卒，諡曰景莊皇帝。子法立，改元貞明承智大同，國號鶴拓，亦號大封人。

法好畋獵酣飲，委國事於大臣。閏月，嶺南西道節度使辛讜奏南詔遣陁西段瑳寶等來請和，且曰「諸道兵戍邕州歲久，餽餉之費，疲弊中國，請許其和，使羸瘵息肩。」詔許之。讜遣大將杜弘等齎書幣，送瑳寶還南詔，但留荊南、宣歙數軍戍邕州，自餘諸道兵什減其七。

史料 6.21 『新唐書』卷二百五十三 乾符 5 年（878）4 月

酋龍年少嗜殺戮，親戚異己者皆斬，兵出無寧歲，諸國更讎忿，屢覆眾，國耗虛。蜀之役，男子十五以下悉發，婦耕以餉軍。

史料 6.22 『資治通鑑』卷二百五十三 乾符 6 年（879）2 月

二月丙寅，雲虔至善闡城，驃信見大使抗禮，受副使已下拜。己巳，驃信使慈雙羽、楊宗就館謂雲虔曰「貴府牒欲使驃信稱臣，奉表貢方物。驃信已遣人自西川入唐，與唐約為兄弟，不則舅甥。夫兄弟舅甥，書幣而已，何表貢之有。」……驃信以木夾二授雲虔，其一上中書門下，其一牒嶺南西道，然猶未肯奉表稱貢。

史料 6.23 『資治通鑑』卷二百五十三 乾符 5 年（878）4 月

南詔遣其酋望趙宗政來請和親，無表，但令督爽牒中書，請為弟而不稱臣。詔百僚議之，禮部侍郎崔澹等以為：「南詔驕僭無禮，高駢不識大體，反因一僧咕囁卑辭誘致其使，若從其請，恐垂笑後代。」高駢聞之，上表與澹爭辯，招諭解之。澹，璵之子也。

五月，丙申朔，鄭畋，盧攜議蠻事，攜欲與之和親，畋固爭以為不可。攜怒，拂衣起，袂冒硯墮地，破之。上聞之，曰：「大臣相詬，何以儀刑四海！」丁酉，畋、攜皆罷為太子賓客、分司。

史料 6.24 『資治通鑑』卷二百五十三 廣明元年（880）6 月

趙宗政之還南詔也，西川節度使崔安潛表以崔澹之說為是，且曰「南詔小蠻，本雲南一郡之地。今遣使與和，彼謂中國為怯，復求尚主，何以拒之。」上命宰相相議之。……乃作詔賜陳敬瑄，許其和親，不稱臣，令敬瑄錄詔白，并移書與之，仍增賜金帛。以嗣曹王龜年為宗正少卿充使，以徐雲虔為副使，別遣內使，共齎詣南詔。